

大道芸アジア月報 2024 年 12 月

vol. 36, no. 12

編集・発行人 上島敏昭

〒165-0025 東京都中野区沼袋 2-31-2

春山荘・東

★大道芸案内

主な大道芸スポット（土・日・祝日など、通年大道芸が見られるポイント）

■大阪・天保山海遊館広場 <https://www.kaiyukan.com/thv/marketplace/>

■大阪パフォーマーライセンス <http://www.osaka-performer.com/index.php>

■名古屋・大須ふれあい広場 ■名古屋 POP UP ARTIST <http://popup-artist.com/index.html>

■しずおか大道芸の街 <http://shimaruikai.org/> ■江ノ島大道芸 <https://www.fujisawa-kanko.jp/feature/daidogei.html>

■ヨコハマ大道芸（山下公園、グランモール公園、） <http://daidogei.jp/>

■お台場・デックス東京ビーチ ■テラスモール湘南 www.studioeggs.com

■東京都ヘブンアーティスト <https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/bunka/heavenartist/>

■中部大道芸ネットワーク <https://www.facebook.com/mrkrddg>

■仙台まちくるパフォーマーズ <https://machi-kuru.com/performers>

★浅草雑芸団の旅

1月2日（木）井の頭自然文化園・お正月の祝福芸

1月3日（金）すみだ川七福神・はるこま七福神めぐり

1月4日（土）すみだ郷土文化資料館・資料館でお正月！

★今月の大道芸公演

△吟遊詩人の世界 https://www.minpaku.ac.jp/ailec_event/51494 ○国立民族学博物館 特別展示館

●開催中（9/19より）～12月10（火）※水曜日休館

△ 秋季特別展「紙芝居の歴史と阪本一房」 <https://www.city.suita.osaka.jp/museum/> ○吹田市立博物館

●開催中（10/12）～12月24（日）

△なにわ紙芝居寄席 <https://tezukurikamishibaikan.com/event/> ○道頓堀ミュージアム並木座（地下鉄「日本橋」駅下車、徒歩5分）

●12月1（日）一部：13：00-14：30 二部 15：00-16：30

八尾雅之、野間耕平、たまちゃん、青空みかん、ピーマンみもと

入場料：¥2000（一部・二部通し券¥3500）

問合せ：090-3712-4540（大塚珠代）

090-4280-8311（三本章代）

△クリマ大道芸 2024 <https://1010-tento.localinfo.jp/posts/55803585/> ○神宮外苑 絵画館前 総合球技場

●開催中（11/19より）～12月25（水）11：00-21：30

12/1：りずむらいす、Tento、アンティークドールじっさい、12/2：アンティークドールじっさい、12/3：ミコえはら、Tento、FALCON、

12/4：ユースケ、Tento、FALCON、12/5：ミコえはら、Tento、12/6：KAZU、Tento、なにみてるの、12/7：Rocks、Glad the Ator、

12/8：idio2、ぼろすけ、Tento、POPIN!CANDY!、12/9：ぼろすけ、Tento、なにみてるの、12/10：ぼろすけ・たつきん・Tento・FALCON、

12/11：ぼろすけ、Tapulse、Tento、アンティークドールじっさい、12/12：Rocks・Tento・なにみてるの、12/13：Tapulse、Tento、

イロノナイ世界、12/14：Tapulse、Tento、アンティークドールじっさい、12/15：Tento、Bronz Bros、12/16：KAZU・Tento・Bronz Bros、

12/17：ZEN、Tento、Bronz Bros、12/18：ZEN、Tento、イロノナイ世界、12/19：KAZU、Tento、なにみてるの、12/20：Tapulse、Tento、

なにみてるの、12/21：idio2、ZEN、Tento、Glad the Ator、12/22：idio2、KAZU、Tento、なにみてるの、12/23：KAZU、ZEN、Tento、

Bronz Bros、12/24：りずむらいす、Idio2、Tento、Bronz Bros、12/25：りずむらいす、ZEN、Tento、Bronz Bros

入場料：（12/20まで）大人（中学生以上）平日 1,000 円／土日祝日 1,500 円 小人（小学生）500 円／未就学児無料

（12/21-12/25）大人（中学生以上）2,000 円 小人（小学生）1,000 円／未就学児無料

※大人料金にはオリジナルマグカップノベルティ付き

△ふじさわスタチュー美術館 2024 https://x.com/fujisawa_statue ○藤沢駅北口サンパール広場

●11月30（土）・12月1（日）11：00-16：00

△宿場町大道芸・北千住からの輝き <https://x.com/PerformerParts/status/1861241330393063594/photo/1> ○北千住・旧日光街道

●12月8（日）

ミルコ、ムーンウォーカー、ポール、金管バンド、パーツイシバ・ミュージックサーカス、長谷川あひる、AXEL 翼、バルーンともみ、

DJ-ROBOT-OLIVE、レプリカさん、ソラと晴れ女

△iHola! iAmigos! <https://www.silkroad-cafe.com/events/hola-amigos/> ○錦糸町・シルクロード・カフェ

●12月10(火) 19:00

Special guest:パソドブレ・サーカス 出演:タカダアキコ、バーバラ村田、加納真実、ヨロ昆撫、DJ:ブラバスキ

Adv: ¥4000+1drink

Door: ¥4500+1drink

予約: <https://www.silkroad-cafe.com/events/hola-amigos/> から予約フォームへ

問合せ: yorube.info@gmail.com 企画:株式会社ムラタ制作所

△磯子区商店街朝市 <https://x.com/PerformerParts/status/1861389828392395235> ○川崎市磯子区・区役所前

●12月14(土) 10:00~14:00

パーツイシバ・ミュージックサーカス、サーカス少年こうら、Creator CHIKI、アンドロイドール YuE、A0(あお)

△沢入国際サーカス学校発表会 https://x.com/sago_aki/status/185018833770033410/photo/1

●12月14(土) 15(日) 13:00~ ○群馬県みどり市・旧東中学校体育館(沢入国際サーカス学校)

佐合陽裕、森崇彰、油布直輝

△エンターテイメント亀戸! vol.20 ○江東区亀戸十三間通り商店街

●12月15(日)

口岩美保子、あくびがうつる、あいあい、クーンヒーロー JUNKO、花売少女、スタッツ、猫のアーサー、ハードパンチャーしんのすけ

△どっこい!ちんどん通信社40周年大感謝祭 <https://tozaiya.co.jp/> ○千日前2丁目・味園ユニバース

●12月20(金) 16:00開場-20:00閉場

伊勢大神楽山本源太夫社中、今貂子、kanta&青木美香子、クロワッサンサーカス団長清水ひさを、サキタハヂメ、体現集団「天憑」、田浦高志、山中一平(順不同・五十音順)

当日・前売り¥3000(1drink付き)

※小学生以下入場無料、飲食物持ち込み禁止、再入場の際は1drink代(600円必要)

△異世界住人のパフォーマンスライブ#4 <https://isekaijuninnoperformancelive.notion.site/4-126f38935386800198d0c1d27ca4b471>

●12月21(土) 12:00-18:00 ○クリエート浜松 ふれあい広場

ヒョウガ、マッシュ&ていの、くどう、紅煌堂の獅子雄、ノナメ、シュエ・ガオ、CHISHA、じゃぐたく、PESTRICA、健山
入場無料投げ銭制

△静岡クリスマス大道芸2024 <https://x.com/Xmasdaidougei/status/1852677397218558195> ○静岡市・青葉シンボルロード

●12月21(土) 16:00-21:00

大道芸人Gakkey、パフォーマンスNAO、森崇彰、ハタダ、大道芸人コーキ、星丸、

●12月22(日) 15:00-19:00

じゃぐたく、加藤ひろみち、大道芸人Gakkey、大道芸人ていが一、ナオキ、team輝星、スタチュー-UNIDOLL-

△伊勢大神楽増田神社総舞 <https://www.kandayuyamamoto.jp/> ○桑名市太夫・増田神社境内

●12月24(水) 12:00ごろから

主催・出演:伊勢大神楽講社

△伊勢内宮おかげ横丁新春郷土芸能2025 <https://okageyokocho.com/> ○伊勢神宮内宮おかげ横丁

●1月1(水・祝)/13(月・祝)/18(土) 19(日)

若林正の

食って極楽

豪華楽屋弁当5連発!

ワタシはナレーターのお仕事は、仕事は短くとも、実際の拘束時間が長い。なので弁当がでることが多いが、近頃は経費節約のためか減ってきている。バブル時代は、飯時になると仕事は終わっていても「食べていきなよ」と鰻重や特上寿司など惜しげもなく食わせてくれたのだが...

先日、大手広告代理店D通の仕事で模擬CMのナレーションという現場があった。入社2,3年目の若手クリエイター達が、思うままにラジオCMを制作演出するというなかなか面白い仕事

なのだが、朝10時~夕4時で五日連続の学校授業みたいなスケジュールだった。当然毎日弁当が用意されるが、それがホカ弁ではなくさすがD通予算があるな!という豪華な日替わり弁当だった。一日目・有名カレー店の野菜カレー、二日目・築地料理屋の幕の内、三日目・牛タン弁当、四日目・魚が美味しい金兵衛の焼き鯖弁当、最終日・エスニックチキンライス、といったラインナップ。



下世話だが、いずれものり弁5,6個くらいの値段じゃなかろうか。味はどれも申し分なく、んまかったが量は少し物足りなかったのが残念。

しかし美味しいものは活力を生み出してくれるようで、その仕事は毎日絶好調であった。



○仕事っぷりが良かったのか次回も頼まれそう!又美味しい弁当食べる度=30ワカ

広目屋の定説・二つの間違い

上島敏昭

○永井荷風の『燈火の巷』と広目屋

チンドン屋の考察は、前回で終了と書いた。ところが、記事のなかに大きな間違いがあったので、訂正のために、もう一度この関連記事を書きます。

間違いは次の通り。「広目屋」という語が使用されている例として取り上げた、永井荷風作『燈火の巷』からの引用。前号では次のように書いた。

たとえば明治36年発表の永井荷風の短編小説『燈火の巷』にも広目屋が登場する。

〈「お蝶、早く来て御覧。広目屋が大勢、面白い風をして並んで居るよ」

これは堀江誠二『チンドン屋始末記』（PHP 研究所）を参考、というかマゴビキした。文章を書く心得で、引用文献は原典にあたるべしというのは、初歩の初歩、あたりまえのことだが、先月号では時間がなくて、その手続きを怠った。11月の連休前に発行してしまいたかったので、まあ大丈夫だろうとタカをくくってマゴビキし、印刷・発送した。その後、気になって永井荷風の全集にあたると、前記の箇所「広目屋」と書かれていた部分は「広告屋」となっていた。ああ、やっちゃった！ いやいや、文学作品だから全集に収録するとき訂正しているのかもしれない。たぶんそんなことだろう。とにかく調べる必要はある。そこで初出にあたることにした。この作品の初出は雑誌『文藝倶楽部』第9巻第9号とある。明治36年の発行。国会図書館に行って検索するとデジタル化されており、調べると、次のように書いてあった。

お蝶、早く来て御覧。廣告屋が大勢、面白い風をして並んで居るよ。

全集とおんなじだ。『チンドン屋始末記』の記載は、完全な間違いだった。この著者がどうしてこのような間違いを書いたのか不明だが、とにかく『燈火の巷』には「広目屋」とは書かれていない。

○「広目屋」が使用された文献

では、「広目屋」の語が出てくる作品はないものか。調べることにした。『日本国語大辞典』全20巻（小学館）には引用文献が出ていたはず。「広目屋」の項目があれば文献が出てくるだろう。図書館に行ってあたってみた。はたして「広目屋」の項があるのか。調べると、次のように出てきた。

ひろめーや【広屋・広目屋】[名] 楽器などを奏して商店や商品の宣伝をして歩くことを職業とした人。広告屋。ちんどんや。*都鄙新聞—明治二四年（1891）四月—四日「墨堤の雑沓中を数十名の人夫異様の扮装をなし数組に分れて歌ひつ漫歩せしが〈略〉此請負は豊町の広目屋なりしと」*春歌秋冬—春（1901）〈正岡子規編〉「広目屋の広告通る日永かな〈牛歩〉」*多甚古村（1939）〈井伏鱒二〉東西屋夫婦喧嘩の件「広め屋の万ヤンがやって来た」（以下略）

やはりその語が登場する文献が、3例引用されていた。それぞれの文献にあたってみることにした。まず、「都鄙新聞」を調べたが、よくわからない。これは後回しにした。

○俳句に登場する「広目屋」

さきに正岡子規の句集「春歌秋冬」をあたってみる。これは、樺山書店発行・大正4年（1915）の版がインターネット公開されていた。



春夏秋冬は俳句選集で、春の部、夏の部、秋の部、冬の部の全4巻から成る。春の部は明治34年刊。夏、秋、冬はそれぞれ、明治35年、35年、36年の刊行とのこと。俳諧叢書の七、八、九、十篇として刊行された。文化遺産オンラインには、富山県高岡市立博物館が所蔵する全巻の表紙の図版が掲載されている。全巻を子規の選として企画されたが、春の部をまとめたとき

ろで病が重篤化し、それ以降は子規の弟子・河東碧梧桐と高浜虚子が引き継いだ。明治30年（1897）以降の正岡子規率いる日本派の代表的句集とされている。同句集には次のように、確かに当該の句が載っていた。

廣目屋の廣告通る日永かな 牛歩

作者の「牛歩」は、伊東牛歩と思われる。「weblio 辞書」には、伊東牛歩（いとうぎゅうほ）は次のようにある。

俳人。僧侶。東京生。名は快順、牛歩は号。正岡子規に就いて俳句を学ぶ。『ましろ』の同人。昭和17年（1942）歿、65才。

また『明治大正俳句史年表大事典』（大塚毅篇、世界文庫、1971年）から、牛歩を探してみると、次のようなことがわかった。

本名・伊東快順。明治11年1月6日、東京・深川猿江町生まれ。明治32年、冬、子規につき俳句を学ぶ。大正6年1月、「新緑」創刊に関わる。発行人・木下蘇子、松本翠影ほか。定型、季題にとらわれぬ自由俳句をめざす。同年解散。11月、「ましろ」結成、発行人・松本翠影。同人となる。

国会図書館サーチで著作を検索すると『俳諧行脚 お遍路さん』（斉藤知白と共著、慧文社、2007年）と『新緑後期第一集』（伊東快順等著、新緑社、1915年）の二冊がヒットした。後者はインターネット公開されている。前者の著者紹介によれば、〈飄逸な行動で数々の逸話があり、「大正の一茶」ともいわれた。〉とある。

また正岡子規の『病牀六尺』は新聞「日本」の連載をまとめたものだが、その百四に病牀の子規を二人の弟子「孫生、快生」が訪ねてきた模様が出てくる。孫生は鈴木芒生、快生は伊東牛歩で、次のようにある。〈二人とも二年ばかり遇はなかったため殊に快生などはこの前見た時には子供々々したいつその小僧さんのやうに思ふて居たが今度遇ってみると、折節髭も少しばかり伸びて居たので、いたく大人びた様な感じがした。〉明治35年8月23日のことかと思われる。師弟の交友の様子が伺えて読んでいて心がほころぶ。

○井伏鱒二のユーモア小説

もうひとつの井伏鱒二の『多甚古村：駐在日記』は昭和14年(1939)刊行。南国の海辺の村、多甚古村(たじんこむら)に村に起った喧嘩、醜聞、泥棒、騒擾などを、駐在所に勤務する甲田巡査の駐在日記の形をとって描いた長編小説で、太平洋戦争のすこし前の庶民の実生活が軽妙に描かれている。ちなみに昭和15年に、今井正監督で映画化されているようだ。また多甚古村のモデルは徳島県沖洲村(現徳島市内)という。広目屋の語が出てくるのは「東西屋夫婦喧嘩の件」の章で次のように出てくる。

(前略)こんな日には早く寝て休養しようと思ってみたところ、廣め屋の萬ヤンがやって来た。萬ヤンといふのは背のひくい四十男の廣告屋で、今日もお宮の前でベルを振り鳴らして口上を述べてみた。「ええい、今度からこの社の横に夜店が御座アい。どなたもこなたもひなたも、ギザギザ持って、午後の六時に御座れ御座れ」といふ藝のない口上である。(後略)

昭和14年にもなるとチンドン屋というほうが一般的だったと思われるが、ここでは広目屋が使用されている。またタイトルには東西屋が使用されているところを見ると、「チンドン屋」「広目屋」「東西屋」、どの語も使用されていた時代なのと思われる。

○都鄙新聞は幕末の新聞

明治34年に出版された俳句集と昭和14年に刊行された小説にはたしかに「広目屋」の語は使用されていた。問題は都鄙新聞である。国会図書館の新聞資料室で調べると、たしかに「都鄙新聞」は存在する。しかし、慶応4年5月に創刊されて8号まで出ただけの新聞で、明治24年に出ていたとは考えられない。ちなみに「近代新聞の胎動—中外新聞から内外新聞まで」(藤原恵)『関西学院大学社会学部紀要』第20号(1970年3月)所収)によれば、いわゆる“勤王派新聞”としてランクされる関西で発行された新聞のグループに属し、おなじ仲間「各国新聞紙」(大阪)、「内外新聞」(大阪)、「都鄙新聞」(京都)、「湊川濯餘」(神戸)、「崎陽雑報」(長崎)、「浮世風聞」などがある。そして、次

のように書かれている。

京都から出版した「都鄙新聞」は旬刊で京都でははじめての新聞である。「都鄙民間の事体に益ある新聞を得て速に刻行し遍く億兆の耳目を開ん事を欲す」と社告をして「天朝御沙汰書の類は此冊子に載せず、蓋し官代日誌陸続刻行あればなり」といつているように戦況の風聞をやめ、第4号以後は市井の風聞や各地からの手紙、美事善行をとりあげている。「太政官日記」の版元村上官兵衛が版元となり「至誠館」の名義で出版している。朝廷の御用新聞といえよう。

ながながと引用したが、発行時期から考えても、この新聞に「広目屋」がでてくるはずがない。

○新聞にでてくる「広目屋」の広告

では他の新聞ではいつごろから広目屋が出てくるのか。アーカイブが公開されている読売新聞と朝日新聞を探すと、1990年代以前の例がいくつもヒットした。それらを新聞ごとに年代順に並べると次の通り。

朝日新聞	1889年6月11日
	1891年8月11日
	1892年8月5日
読売新聞	1890年11月11日
	1891年4月14日
	1891年7月31日
	1892年2月4日

このなかには、記事ではなくて広告も含まれている。なかなか気が利いた広告なので、本題からははずれるが紹介しておきたい。

1890年11月11日の広告は、浅草の凌雲閣開業式の広告。



凌雲閣は通称「浅草十二階」。日本で最初の高層建築で、日本初のエレベーター設置建築としても知られる。11階と12階が屋外に出て観覧できたので、東京の景色を高見の見物するのが

名物となった。

エレベーターは数日後に故障して使用不可能となり、見物客は内壁に沿って設えられていた階段を歩いて登った。各階では物産販売をしていたという。この広告によると、「廣目屋」は、閣内の広告を一手に取り扱う「廣告社」と協議の上、特別契約ができて、同社と並列で広告取り扱いすることになった。凌雲閣という新名所開業にことよせた会社の宣伝である。

もうひとつは、アイデア広告。



①ハイ、私は百三十六番です... さまおなじみの廣目屋です。②ハイ新聞廣告ハ非常の割引を以て一切取扱ひます... ③市中廣告方ハ弊店独得の妙技ですハイ広告の方法なれば何んでも御相談ください廉価で妙趣向が沢山有升ハイまいど有りがとう存しました委しい事ハ係りの者を車で飛せますから御相談なして下さい... ハイさようなら
新聞廣告 市中廣告
そのほかなんでも
広告一式は
京橋豊町
廣目屋二限る

斬新な、人を食った広告で、奇抜さ、面白さは他の広告を圧倒している。

○明治 24 年 4 月 14 日の記事

このなかに、読売新聞 1891 年 4 月 14 日の記事があった。これは次のような記事だ。

キリンビール運動会 横浜なる明治屋のキリンビールは近来中々盛大に至りしが尚広目のためさる十一、十二の両日豊町の廣目屋が請負ひて珍しき広告を向島になせり

この記事は『日本国語大辞典』に掲載された「都鄙新聞」の記事と同日のもので、内容も共通であるように思われる。もしかしたら、この日のほかの新聞をあたればヒットするのではないか。そう考えて、当時首都圏で発行されていた他の新聞の、同じ日にちのものを見てみよう。と、都新聞、国民新聞などを閲覧申込みしていると、国会図書館の係の人から声を掛けられた。「都鄙新聞」について相談した受付の係のかたで、「ちょっと時間があつたので調べたら、都新聞にこんな記事がでていました。」という。都新聞、明治 24 年 4 月 14 日の記事。

麒麟ビール 広告の為め十一十二両日間墨堤の雑沓中を数十名の人夫異様の扮装をなし数組に分れて歌いつ舞ひつ漫歩せしが頗る人の注意を惹きたる様なりき此請負八豊町の廣目屋なりしと

まさしく探していた記事、そのものだった。つまり都鄙新聞と書いてあつたところは、正しくは都新聞だった。

これで一応は問題解決なのだが、なぜこの記事が引用されたのかはよくわからない。広告でなく記事として廣目屋が出てくる初めての例ということなのだろうか。しかしもっと早い例としては、朝日新聞 1899 年 6 月 11 日の記事がある。せっかくなのでこれを引用しておく、

三成社の勉強 諸新聞広告取次を以て営業とせる山下町三成社にて八本日より明後十三日まで新聞廣目屋を多勢雇ひ入れ諸新聞の表題を染込たる印半天を着せ異形の帽子を被らせ市中至る處へ諸新聞を撒き散らすと

○田谷力三と広目屋

最後に広目屋についてなんども語っていた有名人として田谷力三を紹介しておきたい。これは先月号を発行したあと、民俗芸能学の三隅春雄先生からお便りを頂戴し、教えていただいた。おたよりには次のようにある。

(前略)かつて田谷力三氏から少年のころ広目屋を追いかけたのがきっかけで三越少年音楽隊に入り音楽の道にすすんだとの話を聞いたのを思い出しました。“道”がいつの時代も、人の心をゆるがせる芸能のステージであったことを改めて感じました。(後略)

オペラ歌手の田谷力三(1899 - 1988)のコンサートには何度か聞きにいったことがある。そこでは「恋はやさし野辺の花よ」とか「ディアボロの唄」などを朗々と歌うのを楽しんだが、子供の頃の思い出としてよく三越少年音楽隊のこと、オペラの師匠だったローシー先生のことを話していた。三越少年隊という子供の楽隊があつたという事実が強烈で忘れていたが、そういわれれば広目屋の話もあつたように思う。

そこで、ついでなので田谷力三の記事も雑誌から探すと、いくつかに広目屋の思い出を述べているものがあつた。最後にそれを紹介しておきたい。次の文章は『子どものしあわせ—母と教師を結ぶ雑誌』第 268 号(1977 年 8 月)に掲載された「母の像 丸髻姿」(田谷力三)である。

(前略)元来、私の家は先祖代々徳川直参の旗本で、御維新で家禄奉還後は下谷練堀小路の大きな屋敷と神田明神下の家が残つたが、私がもの心ついた時は銭形平次でお馴染みの明神下に住いしていた。二、三歳のヨチヨチ歩きの頃から広目屋の楽隊について行つては迷い子になってお巡りさんに送り届けられて、私は母を心配させた。(後略)

田谷少年のころを捕えた広目屋の楽隊。その魅力は少年の人生に多大な影響をあたえた。広目屋は日本の音楽に隠れた功績を残していた。